R O G I C

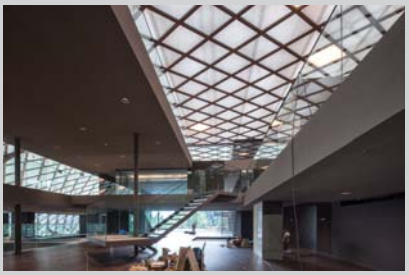
設計コンセプト

グラデーションオフィス

日本の民家が世界に誇れる独自性のひとつに、軸組み構法によってもたらされる居室の開放性が挙げられる。固有の構造形式が育んだどこまでも反復可能な空間の広がりは、「奥行き」という独自の空間概念を生み出すに至った。このオフィスでは、ひと続きな空間体験のなかで、自然環境の階調差を顕在化させるような環境づくりを試みた。大きな屋根の下で、太陽の光や四季折々の変化に富んだ気候や風景を、建築を通してゆるやかに感じられる執務環境は、自然との結びつきに乏しい私たちにとって、新しい価値をもちうるのではないか。「グラデーションオフィス」というコンセプトの由来である。自然と共存し、それを楽しむ日本の暮らしを追体験できるような場になればと考えている。

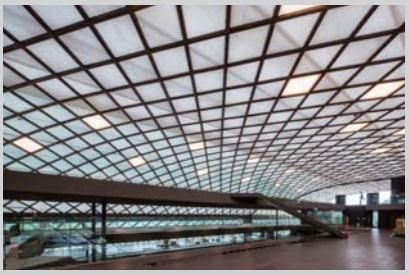
立体的なワンルーム

日本のどこまでも反復可能な一単位は「間」である。間がつづくその様はワンルームの建築である。「間」を様々なレベルでずらし浮遊、横断させ、ぞれぞれの活動を俯瞰、仰視することで、すべての社員が領域感をもちながら全体性を感じることができる、立体的ワンルームを作った。



半外部オフィス

オフィスが外部とつながる方法を考えた際、人間はどこまで自然環境を気持ちのよい環境として認識できるのか。その問いに対して、緻密なシュミレーションのもと、ひとつの回答として半外部オフィスという概念に至り、外気温度が15度から31度（通常の1.8倍）までの範囲で開放することを可能としている。

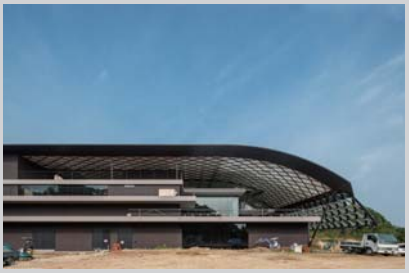


光

より自然の変化を感じるよう自然光やLEDを透過する素材は、和紙にちかく自然の変化が美しく感じられるロキフィルターを採用した。一般オフィスで1000ルクス以上、グラデーションオフィスで1500ルクス以上を確保し、天候の変化やLEDが全体をおおう天井に映しこまれる、第二の空として機能している。

新しい自然

ROGICは、フィルトレーションされた光、風、寒さや暑さなど体感する新しい自然と一体化した研究所である。合理的な研究成果とは何か、本質的な研究活動とは何かを突き詰めた上で、不均一に混ざりあう多様な建築空間こそがより人間的で自然だと考えた。それらの新しい自然を実体感することにより、感動を得てインスパイアを起こし、爆発的な成果に繋げることがROGICにおいての最終目的である。



Tetsuo Kobori Architects
株式会社 小堀哲夫建築設計事務所

設計・建築｜小堀哲夫建築設計事務所　構造・設備・環境シュミレーション｜Arup
照明デザイン｜岡安泉照明設計事務所　ランドスケープ｜オンサイト計画設計事務所
開発｜町田設計　防災｜明野設備　施工｜大成建設　関電工　高砂熱学工業　日管